地域ケア会議からみた地域の課題

令和７年度生活圏域地域ケア会議

圏域	甲西	石部	甲西北	日枝
開催日程 場所	令和8年2月19日（木） サンライフ甲西大ホール	令和７年11月13日(木) 石部老人福祉センター２階大ホール	令和7年10月16日（木） 菩提寺まちづくりセンター	令和7年12月18日（木） 水戸コミュニティーセンター2階会議室
参加人数および関係機関	参加人数：72名 介護保険サービス事業所、ケアマネジャー、社協、薬局、区長、民生委員、まちづくり協議会（ささえあい推進員）、支え合い推進員、ボランティアスタッフ、サービス付高齢者住宅、銀行、郵便局、交番、地域包括支援センター、市	参加人数：53名 介護保険サービス事業所、ケアマネジャー、社協、薬局、民生委員、まちづくり協議会（ささえあい推進員）、診療所、交番、商店、市議会議員、地域包括支援センター、市	参加人数：68名 認知症サポート医、認知症相談医、薬局、社協、まちづくり協議会（ささえあい推進員）、高齢者見守りボランティア、小学校、駐在所、郵便局、企業、民生委員、区自治会、介護保険サービス事業所、保健所、ケアマネジャー、地域包括支援センター、市	参加人数：59名 まちづくり協議会（ささえあい推進員）、ボランティアグループ、民生委員、区長、介護保険サービス事業所、ケアマネジャー、ケアハウス、薬局、コンビニ、社協、地域包括支援センター、市
会議内容	1.「新しく創設が必要な仕組み・資源」をテーマにアンケートから課題を抽出 〇「認知症・移動支援・集いの場」の3つの取り組み報告 2.グループワーク 「今ある資源の活用」「発掘が必要な資源」「作り出す必要な資源の活用」の3つについて話し合い	1.地域課題について報告 ①認知症への理解（地域で見守る目を育てる） ②介護者・当事者が集える場の継続 2.グループワーク 事例をもとに、お住いの地域で生活を続けて行くにはどのようなサポートがあれば良いかについて、参加者同士がアイデアを出し合い発表にて共有を図った。	1.認知症のある高齢者の散歩に対してのチーム作りと課題の報告 ①家族の負担を考慮した上でのチーム作り ②認知症の専門医に繋げる 2.グループワーク 「不安な様子の高齢者を見かけたら、どんな風に接しますか？」	1.移動や社会資源をテーマに今ある資源を報告 ①移動支援活動の報告 ②現存の社会資源の確認 2.グループワーク 事例をもとに、新たに地域にあったらいいなの資源や仕組みについてのヒントやアイデアをグループワークで各々の立場も踏まえて意見交換をおこなった。
グループワークでの主な意見	①「今ある資源の活用」ではすでに開催されているカフェや移動スーパー、百歳体操、地域のサークルなどそれぞれの地域で活動されていることを共有することができた。 ②「発掘が必要な資源」については①で出た活動をつなぐ仕組みやそこまでの移動手段、後継者育成、継続していくための経済的な仕組みなどについての意見が多くあった。 ③「作り出す必要がある資源」は簡単なお手伝い（庭掃除や電球の交換など）サービスや子供と高齢者が触れ合える場所、若い人と高齢者の交流の場やセニアカーレンタルの仕組みなど多くのアイデアが出た。	改めて認知症を正しく理解することが大切だと感じた。地域の実情も再確認できる場に、支援者としてもなった。地域で実際に活躍されている方が多く、その方々から生まれる言葉が身に染みた。支援する側も守られることを前提に情報共有し、複数人でかかわることの大切さに気づかされた。地域全体で見守っていくという、これからの姿が見えた気がした。付箋に書いて文字にしていくことで分析し、整理することが出来、地域課題について深められた気がした。	・声を掛ける：否定しない。引き止めない。まず見守ったり、挨拶として声をかける。 ・連携する：様子が気になる時は、警察、地域包括、民生委員等相談先に繋げる。 ・平時から連携する：何かあった時のために平時から連携し、必要な情報共有をしておくことも地域での見守りを強化していく上で重要である。色々な人とのコミュニケーションを日頃から大切にしている。 ・困っているかわからない。 ・声を掛けづらい。 ・声をかけた後が不安	・隣近所での関わりが大事、日頃からの付き合いを大事にし、買い物の支援など近所で声かけする・子供と高齢者が地域で世代間交流ができるようにする・歩行器やセニアカー等が町なかで自由にレンタルできるステーションをつくり移動できやすくする・免許返納者等にAIの活用をおこなう・自動運転の車、バスの運行・歩行器や車いすのまま乗って買い物にいけるノンステップバスの運行・買い物してもらったり、子供預かったり遊んでもらったりできる若者と高齢者の助け合いの仕組みつくり、お手伝いするとチケット発行とかでもいい・同世代が集まる場所やシェアハウスで高齢者が自立して住める場所を地域で提供できるようにする等
地域の強み	地域の強みとしては ①ボランティアタクシーの活動が始まっている地域がある。 ②自治会館での催しが活発なところがある。 ③警察や銀行、コンビニなどとの連携ができている。 ④ご近所同士での助け合いがある地域がある。（ゴミ捨てなどのちょっとしたお手伝いや認知症の方の見守りなど） ⑤老人クラブ活動が活発なところがある。	それぞれの支援者が、自分の役割と他機関の役割をすでに知っており、必要な支援へとつなげていけるネットワークが既にあるのが石部中学校区最大の強み。それぞれの区、自治会で見守りや声掛けの仕組みを考え、実際取り組めている。障がい児・者とともに歩んできた石部中学校区。障がい者・児への見守りの目のベースがすでに市民にあり、認知症に対しても見守る目作りへと認知症理解も少しずつではあるが着実に進んでいる。	・リテラシーの向上：認知症を疾患として正しく理解し、受容する土壌が育っている。 ・顔の見える関係の具体化：駐在所や専門医、地域包括支援センターがそれぞれの役割を認識し、「何かあればあそこへ繋ぐ」という連携ルートが明確になりつつある。 ・当事者視点の共有：「家族の思い」を通じ、単なる見守り対象としてではなく、一人の生活者・家族としての苦悩に共感する姿勢が地域に浸透してきている。	各地域の支援者が、地域を良くしていこうという意識が高く、高齢者への見守り訪問やボランティア活動にも積極的である。また、昔ながらの地域では近隣同士のつながりで自然に見守りがおこなわれており、新興地であっても古くからの住民同士で声かけや見守りがある。各まちづくり協議会が開催しているカフェやランチも地域の高齢者の集いの場になっている
地域課題	ボランティアタクシーなどの移動支援活動が甲西中学校区全体へは広がっておらず、移動手段に困っている地域がある。 簡単なお手伝いサービスの仕組みづくりができておらず、困っている方が多くいる。 自治会加入者が減ってきており、防災上の安否確認が難しい方が増えている。	気になる人に対し、関わりのある人が声をかけていく勇気が必要。石部中学校区の住民が勇気を出して高齢者に限らず「声掛けをし見守っていこう！」のマインドを地域住民と共有出来るように。住民理解の底上げ、認知症をいかに生涯教育として啓発していけるようになるかがこれからの課題。家族が認知症になったら周囲に協力を得られるような地域を目指す。	・心理的ハードルの解消：「声を掛けづらい」「声を掛けた後が不安」という意見に対し、住民が一人で抱え込まずに済む、より簡易的な「初期連絡システム」の周知が必要 ・困っているかどうかの判断の共有：認知症の症状は多様であるため、地域住民が異変に気づくための「具体的な気づきのポイント」の啓発。 ・チームの持続可能性：特定のボランティアや家族に負担が偏らないように、多様な主体（商店、近隣住民等）を巻き込んだ、より緩やかで細かいネットワークの拡大。チームオレンジの活用	・免許返納後の移動手段の不足 ・身寄りのない独居高齢者の増加 ・地域で活動するボランティアの後継問題 ・集合住宅2階以上に居住の高齢者住み替え困難 ・外国籍の高齢者と地域の関わりの希薄さ ・介護保険サービス事業者の不足